

多賀城市文化財調査報告書第40集

野 田 館 跡

— 第1次発掘調査報告書 —

1995年9月

多賀城市教育委員会

野 田 館 跡

— 第1次発掘調査報告書 —

序 文

本市は多賀城跡とその周辺を古代東北の歴史を継承する広域的歴史拠点として、魅力に富んだ歴史的、文化的出会いとふれあいを創造するまちづくりを旨としております。このため近年では、「多賀城跡復元調査検討委員会」を設置し、外郭南門の復元に向けて鋭意努力しているところであります。

市内には私たちの祖先が残した多くの遺跡があります。これらは地中に埋もれた文化財であり、大地に刻まれた人間の足跡を具体的に示すものとして永く後世に残して伝えていかなければなりません。しかしながら、宅地造成等によってやむなく破壊される場合に限り、記録保存のための発掘調査を実施しております

本書は、宅地造成に先立って行われた野田館跡の発掘調査報告書であります。調査の結果、塀跡、溝跡が発見され、これまで不明であった多賀城跡東部様相の一端が明らかになったものと思われれます。

最後になりましたが、発掘調査や本報告書の刊行にあたり、多大な御指導・御協力をいただきました多くの方々に対し、心より感謝を申し上げます。

平成7年9月

多賀城市教育委員会

教育長 櫻井茂男

例 言

1. 本書は、住宅建設に先立って行った野田館跡（第1次調査）の発掘調査報告書である。
2. 本書の執筆・編集は、当センター職員の協力を得て、相沢清利が担当した。
3. 本書中における各遺構の略号は次のとおりである。

SA=柱列跡 SD=溝跡

4. 本書挿図中の断面図レベルは、標高値を示している。
5. 方位の標示は、国家座標の北を用いた。
6. 本書中の土色は、「新版標準土色帖」（小山・竹原1976）を使用した。
7. 本書の作成にあたっては、大山真由美、菅野礼子、朝倉幸子、関根香織、赤坂翼緒子、太田久美子、熊谷純子、皆川厚子の協力を得た。
8. 調査・整理に関する諸記録および出土遺物は、多賀城市埋蔵文化財調査センターで一括保存しているので活用されたい。

目 次

I. 調査要項	1
II. 調査に至る経緯	1
III. 調査方法と経過	1
IV. 野田館跡の地理的・歴史的環境	4
V. 調査成果	4
1. 基本層位	4
2. 発見遺構と遺物	6
VI. ま と め	8

I. 調査要項

- (1) 遺跡名 : 野田館跡
- (2) 所在地 : 宮城県多賀城市留ヶ谷二丁目77-1
- (3) 調査期間 : 平成7年4月20日～5月31日
- (4) 調査面積 : 1,200㎡ (対象面積3,983㎡)
- (5) 調査主体 : 多賀城市教育委員会 教育長 櫻井茂男
- (6) 調査担当 : 多賀城市埋蔵文化財調査センター 所長 烏山文夫
主任研究員: 滝口 卓 主査: 伊藤英子
研究員: 石川俊英 千葉孝弥 石本 敬 相沢清利
技 師: 鈴木孝行 武田健市
嘱 託: 菊池 豊 伊藤 浩 (調査) 滝川ちかこ 小幡輝美
藤岡淑子 (展示室)
- (7) 調査参加者 : 赤間栄二郎 浅野真 阿部トシ子 阿部弘 内海義雄 遠藤実
太田恂一郎 大友良子 長田栄太郎 小野玉乃 鎌田博 日下正夫
後藤しのぶ 後藤みよ子 小松まり 今野孝男 桜井くに子
佐藤容子 笹井希美枝 上路正志 鈴木太伸 武田りき 手嶋興美
南城美枝子 橋本務 早坂剛 平山節子 藤田恵子 星忠次郎
星秀雄 松岡美津枝 真野勝男 三浦あさ子 山田吉之助 渡辺正一
渡辺ゆき子
- (8) 調査協力 : 福仙興業株式会社

II. 調査に至る経緯

本調査については、平成6年7月に当該地を対象とした宅地造成工事が福仙興業株式会社より提示されたため、本件開発計画について協議を行った。当該地は野田館跡の範囲に含まれており、また丘陵を削平して造成する工法がとられることから、事前調査が必要の旨を回答した(平成6年10月)。その後、平成7年4月に福仙興業株式会社より発掘調査の依頼があり、当センターと調査日程、費用の調整を行い、4月20日より発掘調査を開始した。

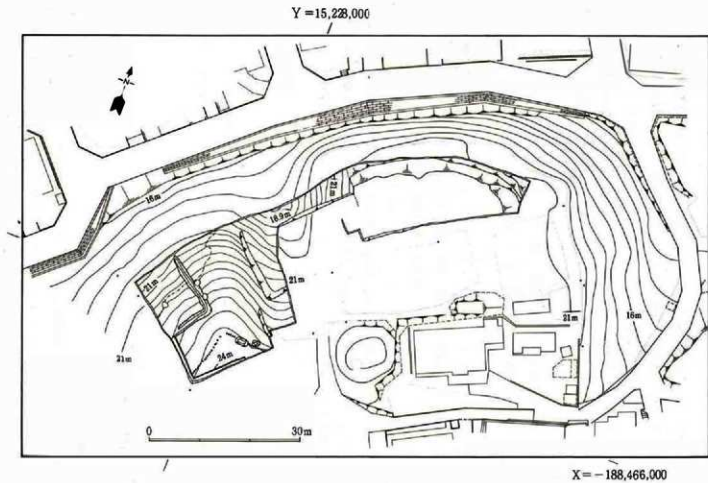
III. 調査方法と経過

今回の調査対象区域は、地形的に中央の谷をはさんで、西側を西区、東側を東区と呼称することにした。まずはじめに、西区と谷の一部が雑木林におおわれているため伐採作業を行う。

これと並行して東区では、植木が仮植林されていたため、この撤去も行う。4月20日より重機を使用して西区の表土剥離を開始し、随時終了したところから作業員が入り遺構検出作業を行った。北半の斜面には褐色砂質シルトの広がりがみられ、検出面より土器片が出土し包含層と推定された。谷の調査は4月27日より開始した。現況で確認できる谷は厚く盛土されたもので、元々はずっと深く入り込んでいることが判明した。ここでは後世の削平による段差がみられたほか、何ら遺構等は検出されなかった。東区は、元地権者の話しによると、植木を植林する際に深さ50cmほど土を北斜面に押し低くしたとのことであるが、一応確認のため表土剥離を行った（4月28日）。その結果、やはり削平を受けており、遺構・遺物とも皆無であった。このような状況から、調査の主力は西区を中心として行うこととなった。西区では基本層位を確認するために、西壁際にサブトレンチを入れて土層の観察を行った。土層は地山面まででⅠ～Ⅲ層に分層され、Ⅲ層が平面で確認していた遺物包含層と判断された。引き続き遺構検出作業を継続し、調査区の中央付近では逆し字状の溝、その南側では等高線に沿うような方向で2条の柱列跡を検出した。これらの遺構の掘り込みと並行しながら、調査区全体に国家座標に載った杭を落とし、1/100スケールの地形図を作成する。個別の遺構については、1/20スケールで平面図・断面図を作成した。5月24日には調査区全体の写真撮影を行う。最後に柱列跡を検出した丘頂部の平坦面に10×10mのトレンチを入れて下層の調査を行うが、旧石器等の遺物は発見されなかった。5月31日、器材の撤収を行いすべての調査を完了した。



第1図 周辺の遺跡分布図



第 2 图 调查区位置图

IV. 野田館跡の地理的・歴史的環境

野田館跡は多賀城市の北東端部塩釜市と境を接するところに所在する。多賀城市の地形は、東半部が低丘陵、西半部が沖積地に二分されている。この東半部の丘陵は標高50～100mの塩釜丘陵から派生してきたもので、鮮新世以前に形成された砂岩・凝灰岩などを基盤としている。その末端の丘陵は大小の谷が複雑に入り組んだ地形を成し、標高は10～50mを計る。およそ20m前後の丘陵については、最終間氷期の海進（下末吉海進）によって形成された可能性が指摘されている（註1）。

本館跡が立地する小独立低丘陵は、東西400m、南北100mで東西方向に細長い島状を呈する。標高は約20～25mで、丘陵裾部からの比高差は約10～15mを計る。現況は大部分が雑木林であるが、一部畑地および植木仮植林地となっている。

本館跡の歴史的背景については、まったく不明といってよいであろう。唯一東側に隣接する矢作ヶ館跡が、『安永風土記』留ヶ谷村古館の章に野田の「屋はきか館」として壱四十間、横二十五間とするされている（註2）。また、加藤孝・野崎準氏は多賀城市内の館跡についてまとめており、この中で矢作ヶ館についてもふれている。両氏は館跡の西側に位置する舌状台地上に幅3m、高さ0.5mほどの土器が約50mにわたってみられるとし、この地点までも館跡の一部としてとらえている。その後、多賀城市教育委員会では機会のあるごとに現地踏査を行ってきており、加藤氏らによって指摘された地点については、矢作ヶ館跡とは区別し、野田館跡として登録し現在に至っている。

〈註〉

1. 鎌田俊昭他（1994）：「柏木遺跡日地区発掘調査報告書」多賀城市文化財調査報告書第36集
2. この地点は紫桃正隆氏によれば、鈴木幸氏の梨畑に使われている丘陵（高さ25m、東西100m、南北50m）の楕円形平場が館跡として伝承されているとしている（紫桃1973）。

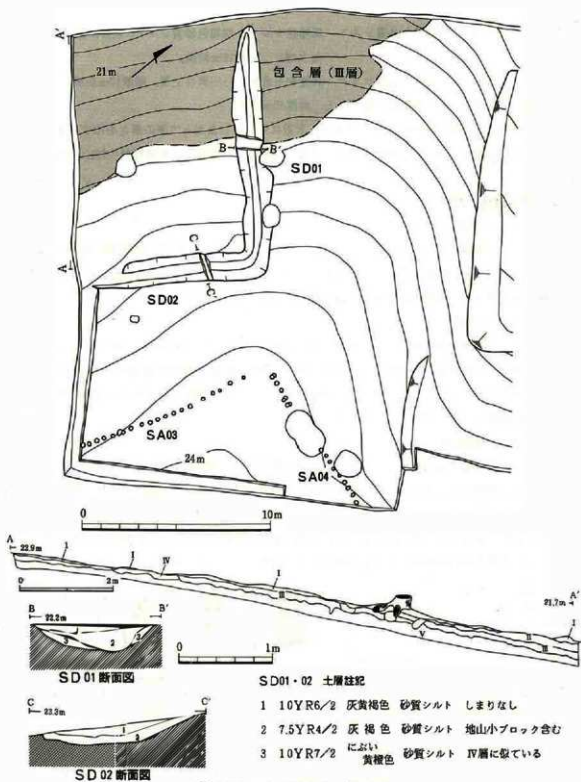
V. 調査成果

1. 基本層位

西区の基本層位は平面・断面の観察によりⅠ～Ⅴ層までに分層された。

第Ⅰ層 10YR5/1 褐灰色シルト しまりのない土で、夫分解の葉が混じる表土層。層厚10cm前後。

第Ⅱ層 2.5Y8/4 淡黄色砂質シルト 夾雑物を含まない均質な土層。層厚20cm前後。



第3図 西区平面図・断面図

第Ⅲ層 7.5YR6/1 褐灰色砂質シルト 黒褐色シルトと明褐色砂質シルトが均質に混じり合った土層。 層厚15cm前後。

第Ⅳ層 2.5Y7/2 灰黄色砂質シルト 夾雑物を含まない均質な土層。層厚10cm前後。

第Ⅴ層 7.5YR6/6 橙色粘土質シルト 層厚30cm以上。

Ⅱ～Ⅲ層は北斜面に自然堆積した土層で、下方にいくにしたがって層の厚さを増す。Ⅲ層には土器細片を若干含み、SD01の検出面ともなっている。Ⅳ層以下が無遺物層の地山である。

2. 発見遺構と遺物

(1) SD 01溝跡

西区北半のⅢ層上面で検出した。方向はN-54°-Wである。長さは13.4mで幅1.5m～1.6m、深さ0.27mを計る。底面は平坦で、壁はゆるやかに立ち上がる。埋土は3層に分けられ、自然堆積の様相を示す。須恵器、赤焼き土器の細片?が僅かに出土した。

(2) SD 02溝跡

西区北半のⅤ層上面で検出し、SD01と逆L字形に接続する。方向はW-55°-Sである。確認できる長さは約10mで、幅1.5m、深さ0.2mを計る。断面形は南半はほぼ平坦であるが、北半はゆるやかに立ち上がる。埋土は2層に分けられ、1～2層がSD01の1～2層に対応する。遺物は出土していない。

(3) SA 03柱列跡

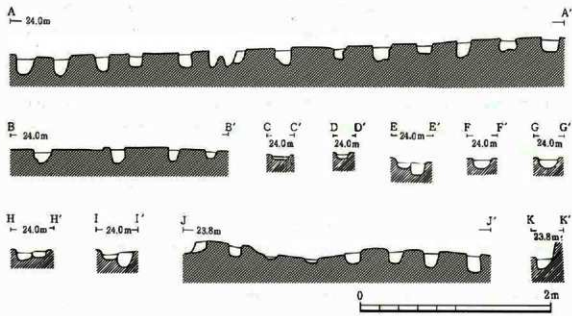
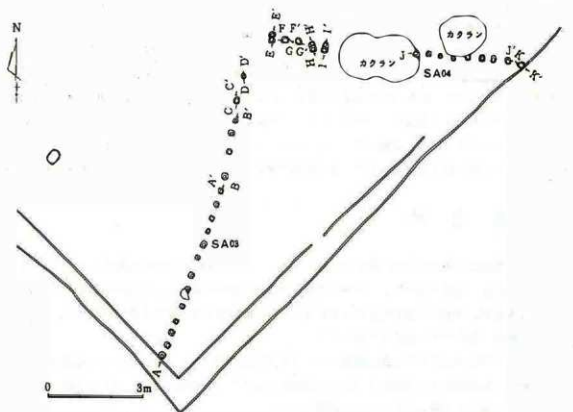
西区南半のⅣ層上面で検出した南北方向の柱列跡である。確認できたのは18間分(9.3m)で、南側は調査区外へと延びている。方向は北から4間分が多少西へ湾曲するため、確実ではないがおよそN-19°-Eである。柱間寸法は平均で0.52mである。柱穴は隅丸方形を呈し、一辺13×22cmの間におさまる。深さは6～23cmを計る。柱痕跡はいずれからも検出されていない。埋土はいずれも灰白色砂質シルトの単層である。遺物は出土していない。



図番番号	種別	器種	地区・層位	外面調整	内面調整	保存	口径	底径	器高	備考	登録番号
4-1	土師器	小型丸底鉢	西区・L-Ⅲ上面	横位ミガキ	ヘラミガキ	体部下半	3.0			内外面とも未焼り	R-4
4-2	"	高台付杯	谷・L-1	ロタコナテ	ヘラミガキ・黒色焼埋	高台 1/4	(3.8)			切り離しは磨滅して不明確	R-1

図番番号	地区・層位	器種	石	材	長(m)	幅(m)	厚(m)	重(g)	備考	登録番号
4-3	西区・L-1	石	磨	質	24	13	4	1.1		R-5
4-4	西区・L-Ⅱ	二次加工のある刺片	風化凝灰岩		24	21	4	2.0		R-6

第4図 基本層出土遺物



第5図 SA03・04平面図・断面図

(4) SA 04 柱列跡

西区南半のIV層上面で検出した東西方向の柱列跡である。確認できたのはカクランで不明な部分もあるが13間分(7.96m)で、東側は調査区外へと延びている。方向はE-5°-Sである。柱間は平均で0.43mである。柱穴は隅丸方形もしくは不整形で、12×22cmの間におさまる。深さは削平されたものを除くと11~19cmを計る。柱痕跡はいずれからも検出されていない。埋土はSA03と同様である。遺物は出土していない。SA03柱列跡とはほぼ直交する位置関係にあることや、柱穴埋土の類似性から一連の遺構と考えられ、同時に存在したものと推定される。

VI. ま と め

- 1 野田館跡は、東西に細長い独立低丘陵に立地し、東西400m南北100mの範囲におよぶ。現況の地形は、丘陵の頂部付近(丘陵の尾根上)が標高約25mを計り、北斜面の東半分は急斜面であるが、西半分は緩斜面となっている。一方、南斜面には上縁に土塁状の高まり、その下に数段の段差が不規則に透られている。
- 2 今回の調査では柱列跡2条、溝跡2条のほか遺物包含層を検出した。出土した遺物は、表土および包含層出土の土器が主であり、遺構から出土したものは少ない。いずれも細片であり詳しい遺構の年代を特定するのは困難である。
- 3 柱列跡については、南側が調査区外に延びているためその全容は不明であるが、北斜面の上縁に位置していることや、方向が等高線の方に沿っており、地形に規制されていたことがわかる。おそらくは南側の平坦面に存在するなんらかの施設を囲んでいるものと推察される。性格としては堀や塀のようなものを考えておきたい。
- 4 野田館跡は、東側に隣接する矢作ヶ館跡と一連の中世城館とする考察もある(加藤・野崎(1973))。今回の調査では、中世城館とする明確な遺構・遺物は検出できなかった。今後、堀跡との関連も含めて南側の平坦面や土塁状高まりの調査が進めば、野田館跡の実態に迫ることができよう。

(引用・参考文献)

加藤 孝・野崎 準(1973):「多賀城市内の館跡—中世陸奥国府周辺遺跡の考古学的考察—」

東北学院大学東北文化研究所紀要第5号

紫桃正隆(1973):「多賀城市内の古城跡」史料仙台県内古城館第3巻

(1776):「安永風土記」宮城県史24



調査区航空写真（昭和36年撮影）

この空中写真は建設省国土地理院が撮影したものを、建設省国土地理院の承認を得て掲載したものである。



写真図版 1

調査区遠景（北より）



写真図版 2

上：西区全景

(南より)

中：谷全景

(北西より)

下：東区全景

(南より)



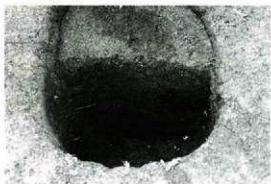
SA 03・04 柱列跡（北より）



P32 埋土断面



P33 埋土断面



写真図版3 P34 埋土断面



P36 埋土断面



写真図版 4

上：SD01・02溝跡
（北より）

中：SD02溝跡埋土断
面（西より）

下：西区西壁基本土層
断面（東より）

多賀城市文化財調査報告書第40集

野田館跡

— 第1次発掘調査報告書 —

平成7年9月18日 発行

編集・発行 多賀城市埋蔵文化財調査センター
多賀城市中央二丁目27番1号
電話 (022) 368-0134

印刷 有限会社 工 陽 社
塩釜市尾島町8番7号
電話 (022) 365-1151
